対話の場としての展覧会のあり方に関する考察
～現代アート展 船／橋 わたす 2020
「へんでふつう わたしたちの10年を話しあう」の開催を通して～

研究代表者：櫻井莉菜
共同研究者：寺田紫衣真・山下紗良・山中愛生
三宅啓暉・佐藤利香・田中綾花

目次

1. 研究背景
2. 研究目的
3. 展覧会当日までの流れ
4. 展覧会の成果と課題
5. 今後の展望

1．研究背景

これまで西尾研究室では芸術系の学部・学科のない本学を舞台とした現代アート展「船／橋 わたす」の企画・運営を行ってきた。これはゼミ生がアートプロジェクトの運営を身につけることや、奈良県立大学を多様な価値観を共有する場として開いていくことなどを目的としている。これまでに3年間開催してきた中で、本展に毎年足を運ぶ近隣住民の存在やボランティアスタッフとして毎年運営に関わる学生の存在など、少しずつ本学が地域に開かれた場になってきたと考えられる。特に、昨年度の「船／橋 わたす 2019」では、展覧会のアンケートや、展覧会内の一つのプロジェクトとして行った対話の場での議論から、多様なバックグラウンドを持つ人々が集まるこの船橋町でアートプロジェクトを行うことの可能性を感じた。しかし、招聘作家の音の出るパフォーマンス作品に対して、大学の近隣住民から苦情の電話が入り、パフォーマンス作品を一時中断したという予想外の出来事もあった。展覧会名を船橋町にちなんで名付けている以上、今後も地域におけるアートプロジェクトを行う上で、このことは深く考えなければいけないことである。その場にいない他者を想像し、その生活に目を向けるということと、アートプロジェクトをより多くの人々と協働で行っていくことの重要性に改めて気付かされた。そして、地域社会の中でアートプロジェクトを行うことの意義を考えるにあたり、まずは地域社会の中に入り込み、“対話”をすることで、本当の意味で地域と大学や船橋町に集う個人を「つなげる」ことが出来るのではないかと考えた。当初は、船橋商店街にある店舗での対話の場作りの実践研究を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で本学を舞台に企画を考え直し実施することとした。

今年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で私たちの日常生活においても大きな変化があった。特にコロナ禍で非対面型のオンライン上でのコミュニケーションが以前よりも私たちの生活に大きなウェイトを占めるようになった。しかし、パソコンやスマー

トフォンなどのオンライン上でのみ交わされるコミュニケーションはどこか味気無さを感じる。このような日々の中で改めて双方向に交わされる健全なコミュニケーションの在り方の一つとして、“対話”は社会に求められているのではないかと考える。“対話”は、他者の考えを理解するだけでなく、自分の考えていることを相手に伝えることで、自己理解にもつながる。また、オンラインだけでは得ることのできない情報や学び、気づきなどは他者との身体を出会わせる対話から得られることが出来ると考える。

以上のことを踏まえて、筆者は本学に対面でのコミュニケーションを得意とするアーティストの瀬尾夏美[1]を招聘した。瀬尾は2011年の震災後、地域社会（岩手県陸前高田市）に旅人として介入し、対話の場を市民と協働で行うなど、対話や会話といった対面で行うコミュニケーションを多く紡いできた。瀬尾の作品や表現活動からは、人々が営む小さな生活に寄り添う姿勢がうかがえる。そのことから、今回本学で、震災をとっかかりに今まで語られてこなかった10年前に子どもだった人たちの言葉を手繰り寄せることで、一人一人がこれまでとこれからの生活を考え、他者と共有できる場を目指す対話の場としての展覧会「へんでふつう わたしたちの10年を話しあう」を行うことを考えた。

２．研究目的

このプロジェクトの目的としては、展覧会をつくりあげる過程を、所属するゼミに関わらず本学の学生自身がアーティストと関りながら学ぶことと、展覧会という対話の場を本学に開くことで、船橋町に集うさまざまな立場の人と多様な価値観を共有することである。筆者は芸術を学ぶ、学ばないに関わらず、アートマネジメントがすべての人が個人と社会との接点をつくり出す上で使うことのできる技術だと考える。昨年度の西尾研究室4年の堀部が行った「現代アートが生み出すコミュニケーションの可能性についての研究～現代アート展「船／橋 わたす 2019」の開催を通して～」では、今後の展望として、アートの力で様々な人と協働することで新たなコミュニケーションが生まれるとともに、今まで考えても見なかったことやできなかったことをともに発見し創造する可能性に向けて、今後はさらにこの輪を広げ、多様なコミュニケーションが生まれる場となるような展覧会をしていきたいとしていた。このことから、展覧会づくりをより多様な立場の学生と協働で行うことで、昨年度からさらに進化した展覧会を開催させる。

３．展覧会当日までの流れ

共同研究者である本学の1年生から4年生までの6名は、2020年11月18日・19日に筆者が瀬尾を本学に呼んで行ったワークショップの参加者である。筆者がワークショップと展覧会について告知するために、デザイナーの佐藤豊に制作してもらったフライヤーで募集を行った（図1）。ワークショップに参加した理由として、「アーティストと関わる機会は滅多にない貴重な機会であること。また、対話の手法に興味がある」や、「展覧会づくりに関わりたい」という理由が挙げられた。ワークショップでは、瀬尾が今まで用いてきた語りや対話の手法を実践しながらレクチャーしてもらった。その際に行ったワークをそのまま展覧会でもイベント的立ち位置として行った。

展覧会の企画の主旨を以下のようにまとめた。東日本大震災から10年目を迎えると共に、コロナ禍を経験している中で、身体を出会わし他者と対話をして、自分の考えと共感でき

図1 「へんでふつう わたしたちの10年を話しあう」フライヤーデザイン

図2 学生が作成したイラスト

る部分や逆に分かり合えない部分を見つけ、同じ時間を共有すること。また、アーティストである瀬尾と共に、10年前に子どもだった人たちと話しあう場をつくり、その中で語られる言葉を未来へ残すこと。タイトルに決めた「へんでふつう」とは、震災から10年という時の流れの中で過ごした“へんでふつう”な日々のことから、現在コロナ禍を迎える中、現在進行形で過ごしている“へんでふつう”な日常という二重の意味がある。

展覧会でどのように鑑賞者の声を拾い上げ、10年を話しあう場をつくるのか議論を重ね、最終的にプロジェクトメンバーが「震災」「コロなか[2]」「語りのワーク／てつがくカフェ」という展覧会を構成する3つの要素に担当を分かれることとなり、準備を進めた。絵を描くことが得意な学生が「語りのワーク[3]」の説明用イラストを作成したり（図2）、本を読むのが好きな学生が「コロなか／コロなか積読文庫[4]」を担当するなど個人の得意とすることや、興味関心に基づいて、展覧会の場の構築を行った（写真1）。

写真1 展覧会の準備の様子 撮影：筆者

４．展覧会の成果と課題

2020年12月12日から20日まで対面での実施のみで展覧会を行う予定だったが、本学の新型コロナウイルス感染症対策にかかる「行動基準」の変更に伴い、学外者の立ち入りが認められないとの通達が総務課から展覧会会期3日目である12月14日に届いた。12日と13日には対面で実施することができ、「てつがくカフェ」を学外の鑑賞者とともに行うなど、対話の場としての展覧会の可能性を感じることができた。14日以降、展覧会をどのように継続していくかを、プロジェクトメンバーで議論した。そこで決めたのは、SNSを用いて、展覧会の様子や、展覧会をつくりあげる過程でプロジェクトメンバーが感じたことを発信するnoteをつかった企画を行うことである。筆者を含めたプロジェクトメンバーがワークショップで学んだことや感じたことをどのように展覧会に落とし込んだのかを表す内容になっている。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンライン上で展覧会を行う取り組みは国内外の美術館などで多く見られるようになった。そもそもオンラインだけで行った展覧会や、対面で実施しつつ、中々遠方へ足を運びにくい状況を配慮し、オンライン上では対面での展覧会のプラスアルファの情報を更新していく取り組みなどさまざまだ。noteを用いた企画ということで、本展は後者にあたると考えられる。そのようにして、会場自体は会期終了まで展示をそのままの形にしていたが、対面での実施からオンラインへ変更するという形で、本展は幕を閉じた。

展覧会の成果としては、このような状況下で3日間だけでも学外者に展覧会をみせることが出来た点と、このような状況下だからこそ、本学の浅田学長をはじめ、事務職員の方や、図書館の職員の方、本学の1回生など、展覧会をつくる側の筆者やプロジェクトメンバーに一番近い存在である学内関係者に展覧会を見てもらえたことである。西尾研究室のゼミ生だけで企画・運営を行っていた際に、一番身近な存在である本学の学生や、学内関係者に届いていないのではないかという思いを抱えていた。しかし、ゼミ生以外の学生とともに企画・運営を行ったことで、昨年度以前よりも展覧会自体がさらに拡張されたからではないかと考える。また、「わたしたちの10年を話しあう」というテーマが、作品を見るだけの一方通行な展覧会ではなく、鑑賞者が対話の場としての展覧会に巻きこまれていく作用を生み出したからではないか。

しかし、その中でも展覧会の課題として、鑑賞者の声を拾い上げることは容易ではないということが挙げられる。本展には鑑賞者が参加するシステムをいくつか用意していた。例えば、作品から感じたことを鑑賞者にふせんで書いてもらう仕組みや、コロなかの自分自身の気持ちや生活の変化について書いてもらう「コロなかセルフチェックシート」というワークシートを用意していた。展覧会の受付スタッフとしてその日に入っているプロジェクトメンバーが鑑賞者に話しかけると、作品から感じたことや震災についての記憶などを話してくれるものの、自発的に作品ごとに設置したこちらの問いかけに応じる鑑賞者は少なかった。鑑賞者の声を拾い上げることが困難だったことから、多様な背景をもった人々と対話の場を紡ぐことの難しさを感じた。

5. 今後の展望

本展は、招聘作家に本学で作品を発表してもらうという形式や、学生自身が企画・運営を行うという点ではベースはこれまで積み上げてきたものを活かしているが、かなり異色な内容となった。それに加えて、新型コロナウイルス感染症拡大という社会の転換期に開催することとなった。その中で本学を舞台に「船／橋 わたす」という名前の展覧会を行う意味とはどのようなものなのだろうか。まだ新型コロナウイルス感染症拡大の終息が見えず、人々の移動が容易ではない状況が続くことが予想される。ある特定の地域に留まらざるを得ない中で、自分自身の生活や日常の解像度をあげることで、この状況を好機と捉えることが可能であると考える。そのことに、現代アート展を行っていくことは一役買うことができるのではないか。

学生同士の学び合いの場でもある展覧会を継続していくこと、学内関係者や船橋町に集うさまざまな立場の人々をより多く展覧会に巻きこんでいくことが望まれる。

注

[1] 1988年生まれ。土地の人びとのことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2012年より、映像作家の小森はるかと共に岩手県陸前高田市に拠点を移す。以後、地元写真館に勤務しながら、まちを歩き、地域の中でワークショップや対話の場を運営。2015年、仙台市で、土地との協働を通した記録活動を行う一般社団法人NOOK（のおく）を立ち上げる。現在は、陸前高田での制作を継続しながら、戦争体験をした人たちや障がいを持つ人たちの話を聞き、展覧会や企画を行っている。

[2] 「コロなか」とは瀬尾が新型コロナウイルス感染拡大の渦中の日々を定義した造語。

[3] 二人一組となって行うワークで、「わたしのふるさと／大切な場所」というテーマでそれぞれが話し、聞き手が相手の語りを「私は」という一人称の主語に置き換えて文章を書き、朗読するというワーク。

[4] 2020年8から9月に札幌文化芸術交流センターSCARTSにて開催された展覧会「ことばのいばしょ」に小森＋瀬尾が出品した作品の一つにある、コロなかにいまあらためて読みたい本を取り上げた文庫で、本学バージョンのコロなか文庫を制作した。